

地域の教科指導力向上に資する 附属中学校の実践事例

郡司 賀透 静岡大学大学院教育学領域 准教授

1 はじめに

本誌前号（令和4年度春号）では、静岡大学教育学部の3附属中学校から、浜松中学校の実践事例を報告しました。今回は、島田中学校の実践事例を紹介します。各附属中学校では、伝統と地域のニーズに基づいて、特色ある教育活動が展開されています。島田中学校では、これからも地域に求められる学校であり続けるために、地域の教員研修にさらに貢献できる学校になるべく、学校改革に取り組んでいます。地域の学校の先生方の教科指導力を高めることにどのように役立っているのか、試行錯誤の取組が進められています。

2 附属島田中学校における「教科研究会」

同校では令和元年度から、学校全体の研究主題を置かずに、教科レベルで地域のニーズに応えやすくするため、各教科のテーマに基づく研究活動を進めています。その姿勢は、従来の「研究発表会」を、「教科研究会」に改称したことにも表れています。理科部の取組をみると、第1回「科学的な根拠をもった判断力の育成：地学教材の活用を通して」（令和元年度）、第2回「理科の見方・考え方を働かせた対話的な探究活動：地球領域における時間的・空間的視点」（令和2年度）、第3回「理科の見方・考え方を働かせた対話的な探究活動：化学領域における質的・実体的な視点」（令和3年度）が教科研究会のテーマとなりました。

島田中学校における理科教科研究会の研究体制は次の通りです。第2回（令和2年度）、第3回（令和3年度）は同じ研究体制で行っています。まず、授業者である中学校の理科教員が2人います（神谷昭吾教諭、澤村佐知子教諭）。研究協力委員には、

島田市、焼津市、掛川市立の中学校から理科教員が参画しています。さらに、静岡大学からは共同研究者として、教科専門教員（延原尊美教授・地学）と教科教育教員（筆者・理科教育学）が関与しています。

同校が、静岡中学校、浜松中学校と異なる点の1つに、地理的な条件があります。2つの附属中学校が政令指定都市（静岡市、浜松市）に置かれている一方、島田中学校は志太・榛原地区をはじめとした県西地区に位置しています。広範な地域を背景しているため、実に多様な個性が認められます。そのため、教科研究会の打ち合わせは時間をかけて、各地域・各学校の実態に応じた意見が出されて、授業案が洗練化していきます。令和3年度は、5月6日、6月22日、9月16日に打ち合わせを対面またはオンラインで行い、11月18日の公開授業を迎えました。

さらに、できあがった公開授業をただ見せるのではなく、侃々諤々と議論を積み重ねていくカリキュラムづくりのプロセスを公開したいのが、附属教員の願いでもありました。この点については、その方法を検討しており、令和3年度には教育実習にきていた学生が打ち合わせ会を見学することで、そのねらいの一部を実現しました。教育実習生がリアルな体験を通して、教員の使命感を深く感じ取ったことはいまでもありません。

加えて令和3年度から、ICTの活用に関する意見交換が活発に行われています。これは複数の自治体を背景にしていることから、使用しているタブレットPCが異なるので、そのすりあわせを行う機会が必要となっているからです。

3 附属島田中学校における理科教科研究会

それでは、島田中学校における理科教科研究会



写真1 コロナ禍前の第1回理科教科研究会（令和元年11月22日）



写真2 ダニエル電池の実験

について紹介していきます。「研究発表会」が「教科研究会」になってから、これまで3回の研究会が実施されました。

（第1回（令和元年11月22日）一般公開）

- 静岡県の大地の変化（1年生）
- 天気の変化（2年生）

（第2回（令和2年11月26日）限定公開）

- ナウマンゾウの化石が見つかる場所はどこだろう。（1年生）

- 日食が新月のたびに見えないのはなぜだろう。（3年生）

（第3回（令和3年11月18日）限定公開）

- 水溶液の性質（1年生）
- ダニエル電池（3年生）

第1回はコロナ禍前であり、多くの地域の理科教員だけでなく、他県からも参加者がきていて盛大に開催することができました（写真1）。

第2回からは感染症拡大防止の観点から、多くの制限を受けたものの、それでも附属教員と研究協力委員の工夫と尽力のおかげで、地域貢献に寄与することができました。この工夫の仕方・技術がまた、地域の教員の学びの機会となったのは、特筆すべきことであるといえるでしょう。

4 附属島田中学校における理科実践事例

理科教科研究会の授業について、少し詳しく見ていきます。紙幅の都合上、第3回（令和3年11月18日）の「ダニエル電池」について紹介します（写真2）。単元は全11時間から構成されており、公開したのは第8時になります。授業者である神谷



写真3 対話を中心とした授業

省吾先生のねらいは次の通りです。生徒は、化学変化とイオンの単元の中で様々な事象と出会い、実際の実験結果とモデルの整合性を考えながら、モデルを選択していきます。対話を軸として、モデルを用いて説明していきます（写真3）。この授業に向けた事前の打ち合わせでは、研究協力委員から「とろみ剤」を使った実験の工夫や地域における本教材による生徒の理解状況などが報告されていて、より現実的なカリキュラムがつくられているのです。

5 おわりに

以上、地域の教科指導力向上にさらに貢献しようとする附属島田中学校の理科実践事例を報告しました。可能な限り、カリキュラムづくりのプロセスを公開することで、地域の実態に応じた教科指導力の育成を目指しています。また、今年度は、研究協力委員の勤務校でも実践を行い、中学校では授業づくりのセミナーも開催予定です。ただし、大学の教科専門教員が関与することで、確かな教科力に裏打ちされた授業づくりが前提となっていて、今日も教育活動が展開されているのです。